

日本年



フランクフルト日本年 事業報告書

フランクフルト「日本年」実行委員会



ごあいさつ

わが国の出版界は、毎年四千点近い世界各国の出版物を翻訳出版しております。一方、わが国で発行された出版物も、各国で翻訳出版されることが、近年急速に増加しております。出版界は、日常業務として、広い分野にわたる国際交流を行っていると思えます。

出版物の国際交流として、毎年10月、世界最大規模のフランクフルト・ブックフェアが行われております。この主催団体であるフランクフルト書籍見本市公社では、1988年から毎年ひとつのテーマ国を取り上げ、その国の文化・社会等を紹介する催事を、ブックフェア期間を中心に、フランクフルト市およびその周辺で実施することになりました。1988年はイタリア年、1989年はフランス年を実施、1990年はヨーロッパ以外の国からということ、日本をテーマ国に指名しました。

わが国出版界はこれを受け入れ、1988年に(株)日本書籍出版協会、(株)日本雑誌協会、(株)出版文化国際交流会の3団体により、実行委員会を組織して準備に着手しました。“静”の活字と異なり、展示・公演・催事という“動”を中心とした総合紹介は、出版界が初めて経験する大がかりな国際交流事業でありましたが、幸いにして実行委員各位と(株)電通の協力により、短日月に各種行事の準備が整いました。

フランクフルト「日本年」の各種行事は、1990年9月から開始され、11月末に終了いたしました。結論から申せば「日本年」は、国際間の理解の推進と、交流の促進に予期以上の成果を上げ得たものと確信しております。

シンポジウムのパネリストとして参加されたシュミット前西独首相は、日本の政治・経済人がドイツの大衆の前で討議したのは初めてであると、その意義を評価しました。

時代を追ってわが国の出版物を展示し、出版物を通して各時代の社会や思想を説明した“JAPAN: A History in Books”の展示もいくつかの国から自分の国でもやってほしいとの希望が出されるなど、各行事それぞれに大きな反響を呼びました。連日、「日本年」や日本そのものを紹介するテレビ、ラジオ、新聞等の報道と相まって、経済の国として注目されていた日本の、伝統に培われた文化や社会を改めて認識し、理解を深めてもらうことができました。

こうした今回の成果は、出版業界のみでは到底上げ得ないものであります。わが国の政府、関係省庁をはじめとし、経済団体、出版関連団体、各企業、出版各社や、フランクフルト市、見本市公社、ブックフェア実行委員会、現地のわが国の出先機関など、多くの方々のご支援とご協力があり、さらに現地における各種事業に快く参加いただいた皆様のご努力があって、初めてなしとげることができたのであります。

パネリストのひとりであった大江健三郎氏の、“こうした事業は、規模は小さくとも続けていくことに意義がある”とのご感想を、私ども出版業界の今後の心構えとすることを結びとして、ここにフランクフルト「日本年」事業報告書をお届け申し上げ、ご支援いただいた皆様に心から御礼を申し上げます。

1991年5月

フランクフルト日本年実行委員会
実行委員長 服部敏幸



目 次

ごあいさつ……………服部敏幸 (フランクフルト「日本年」実行委員会実行委員長)	
フランクフルト「日本年」を終えて……………緑川 亨……………4 (同 企画委員長)	
開催決定から実施まで……………6	
行事一覧表……………7	
各行事報告……………8	
鹿児島おはら祭……………8	
日本のブックデザイン展……………9	
坂本龍一コンサート……………11	
第15期囲碁名人戦第一局……………12	
日本の現代書道展……………13	
ポーランド・クラコフ国立美術館所蔵・浮世絵展……………14	
パークコレクション名品展……………15	
ジャパニーズ・アート・シーン 1990……………16	
現代日本のポスター展……………17	
染め花展……………18	
土門拳写真展……………19	
80年代日本現代美術展……………20	
シンポジウム 世界の転換期と文学表現——ドイツと日本……………21	
ミュージックシーンズ——伝統と新風……………22	
連詩の会……………24	
シンポジウム 日本文学はヨーロッパにとって何を意味するか……………25	
文学対談……………26	
生け花展……………27	
ハウフ市長招宴……………27	
俳句の会……………28	
シンポジウム 新しい世界秩序を求めて……………29	
現代演劇 奴婢訓……………30	
現代音楽の日……………31	
歌舞伎公演……………32	
第3期竜王戦七番勝負第一局……………34	
第3回ドイツ語圏日本語スピーチコンテスト……………35	
“日本館”における展示……………36	
JAPAN : A HISTORY IN BOOKS……………38	
JAPANESE BOOKS TODAY 1990……………40	
JAPANESE PUBLISHING & HIGH TECHNOLOGY……………42	
シアター日本の美「四季・色・かたち」……………43	
日本の芸「木版刷」……………43	
日本図書の海外翻訳出版目録……………44	

Web10 「フランクフルト日本年事業報告書」(1991年6月)
フランクフルト「日本年」実行委員会

世界の日本関係図書展	45
日本語教室	46
識字教材と児童書展	46
スタンド出展した日本の出版社・関連企業等	47
収支決算	48
寄付者・協力者等一覧	50
日本年委員会（名誉委員会）名簿	53
実行委員会名簿	54
主な報道記事等	55
「日本年」に成果・課題（朝日新聞90/10/21）	55
統一前後のドイツで（大江健三郎、読売新聞90/11/5 夕刊）	56
日本の現代音楽に熱い反応（一柳慧、京都新聞90/11/30）	57
ドイツの幸運、日本の不運？	58
（イルメラ・日地谷・キルシュネライト、毎日新聞90/11/4）	
その他の主な報道・紹介記事	58
「日本年」視察団	59
主な制作物（カタログ、ポスター等）	60
スタッフ一覧	62



フランクフルト「日本年」を終えて

緑川 亨（企画委員長）

会 期	1991年9月1日（鹿児島おはら祭り） ～11月25日（クラコフ浮世絵展終了）
会 場	フランクフルト市見本市会場を中心に市内および周辺の各会場
観覧者	日本館入場者 約82,000人 その他事業を含む総計推定 約160,000人 (マイン河岸祭の参加者を除く)
日本から の参加者	約1200人 (実行委員約100名、スタッフ約100名、出演者約570名、 視察団約150名、その他一般参加者約300名)



シンポジウム会場となった
旧市庁舎

「日本年」の準備は、1988年秋のフランクフルト・ブックフェアが開かれている期間に、まず現地において始められた。荒木忠男総領事（現特命全権公使）のご尽力によって現地の関係者も加わり、また、われわれの要請に応じてドイツの日本研究者たちの意見も徴されて、計画のアウトラインの検討はこの段階から開始された。

日本の出版文化を媒介にして日本文化の現状をどのように伝達することが可能なのか、——文化の現在を伝えるためには伝統としての過去にさかのぼり、また未来を展望することが必要になってくる。経済大国であり先進工業国として科学技術の最先端をいく日本は国際社会で注目され、時として厳しい批判の対象になることも少なくないが、その文化が理解され正當に評価される機会は乏しい。大きな地殻変動が世界の各地域に生じ、新しい国際秩序への模索がはじまっている状況の渦中であって、この国際舞台でどのようにして日本文化を伝達する試みを成立させるか、そのことは日本文化の現代におけるアイデンティティを自ら問うことにほかならないことを、この催しに参加した人々は、口にだすことは少なかったが、終始、暗黙の了解事項としていた。

このような意向を前提にして企画は立案され、準備は進められ、実行された。2年間にわたり、とりわけ1989年秋からの1年間は、会合が積み重ねられ、それぞれの役割を担当した多くの人々が多忙をきわめた。

企画は実行委員会の発案によるもの、外務省一在フランクフルト総領事館、ケルン日本文化会館等一主催のもの、各新聞社その他の参加行事などによって構成されているが、それ故に多彩なものとなり、相互に補完し合うことによって、“JAPAN: Then and Now”という基本テーマを実現する上で有効なものとなった。





“日本館”の展示については、行事報告でその委細を見ていただきたいが、“Japan: A History in Books”は、8世紀の百万塔陀羅尼経にはじまり中世・近世を経て明治・大正・昭和に至る日本の出版の歴史を、数多くの貴重な古書籍を系列を追って陳列し、日本国内でもかつてみない見事なものとなった。国立国会図書館、東洋文庫、日本近代文学館等の積極的な協力を得てはじめて可能なことであった。これに続いて現在の日本の出版物が自由に手に取れる工夫をもって並べられ、すでに実現を見た電子出版のソフトやハイ・テクノロジーの機器、ハイヴィジョン等がこれらに連続する。実物が訴える力は百の説法よりはるかに強く、有効である。この一連の展示は大きな話題をよび、7日間の会期中に8万余の人々が入場し、いつも活気が場内に満ちていた。

シンポジウムはいずれも盛況で、用意された同時通訳を聞くイヤホンも足りないほどであった。10月6日のシンポジウムには統一直後のベルリン東地区から牧師シュトルベ氏が寸暇を惜しんで駆けつけてくれた。彼は、東西間の緊張緩和は人類が真剣に南北問題にとり組む契機をつくっている、と語った。「新しい世界秩序を求めて」というタイトルの下に開かれたこのシンポジウムでは、すでに湾岸戦争への対応についても語られている。この会場でも、また文学のシンポジウムに於いても、日独それぞれの国が戦後45年を経過して直面している状況について、その類似点と相異点、共通性と異質性を弁別し、正しい認識を持つことが追求された。このようにして、「日本年」は1年前には予期し得なかった東西ドイツ統一と時を同じくして開かれ、国際的な相互理解を深める場を、観客や聴衆も含めてすべての参加者に提供した。

多くの国々の人から共通して問われたことがあった。それは、この「日本年」に示された日本の関係者の熱意は、この催しに際しての1回限りのものなのか、恒常的なものなのか、ということであった。この問いは、国際的理解を求める努力が日常的なものであってはじめて意義を持つという考えを前提にしている。「日本年」を一過性の「お祭り」にしないことは、当初から意図されたことであったが、ドイツ統一に湧く世論の中で「日本年」が注目を集め、行事として成功裡に終わった時に、ただちにわれわれはこのような問いかけに直面した。「日本年」の終了は文化を国際化していく出発点をつくったことを意味しているようだ。日本ペンクラブ編集の「文学編」とその他の分野の2分冊になる日本図書の海外翻訳出版目録が、担当した人々の努力が実って、この「日本年」に際して刊行された。出版の国際化についてようやく海図ができたわけである。この目録の内容が年ごとに充実したものとなり、改訂版が出される日をまって、「日本年」の具体的な成果をわれわれは見ることができるのであろう。



ブックフェア会場全景



「日本年」開催決定から実施まで

88. 2.22 書協理事会、フランクフルト・ブックフェア公社から「日本年」実施要請を受け、受け入れの方向で検討を開始。
- 5.10 書協通常総会、理事長挨拶で「日本年」実施の方向を表明。
7. 1 書協理事会、「日本年」開催要請の受諾を決定。
- 7.26 「'90フランクフルト図書展日本週間実行委員会」(以下旧実行委員会という)設置、委員20名を委嘱。
- 8.23 旧実行委員会、第1回会合。徳間康快委員長、前田完治副委員長を決定。検討事項としてテーマ、事業計画、会場、財務、実行組織等を掲げる。
- 10.5-10 第40回フランクフルト・ブックフェアおよびイタリア年を実行委員多数視察。「日本年」計画について、独側の日本学者や出版・放送関係者と懇談。
- 11.24 旧実行委員会に基本構想策定のため小委員会設置。
- 12.14 旧実行委員会、懶電通の協力を得ることを決定。
89. 4.14 旧実行委員会、小委員会から基本構想案提出。テーマ「JAPAN NOW」、シンポジウム、展示、実演、公演等各種事業、総経費10～15億円、実行組織等を了承。
- 4.25 書協理事会、基本構想案を了承。事業名称を「日本週間」から「日本年」に変更。新実行委員会体制への移行を決める。
- 5.12 書協通常総会で、会員社の協力を要請。
- 5.23 書協理事会から旧日本雑誌協会、旧出版文化国際交流会に共催申し入れ。3団体による「フランクフルト「日本年」実行委員会」の設置、実行予算、指定寄付方式による募金等の基本方針を決定。
- 5.25 フランクフルト「日本年」実行委員会(以下、実行委員会という)、第1回会合。服部敏幸実行委員長はじめ副委員長、総務、財務、企画、広報渉外の4専門委員会の設置および各委員長を決定。
6. 服部実行委員長他3名訪独。現地委員会と、企画案についての打ち合わせ実施。
- 10.11-16 第41回フランクフルト・ブックフェア及び「フランクフルト年」視察。10/12、見本市プレスセンターにおいて「日本年」基本構想を記者発表。
- 10.17 内閣、定例閣議において日本年について“その実施に関し、関係行政機関は必要な協力を行う”旨の閣議了解を行う。
- 11.17 翻訳出版目録小委員会を企画委員会の中に設置。
- 11.22 「日本年」事業に関する募金における指定寄付金としての取り扱いが認可される(大蔵省告示第199号)。期限=平成2年10月1日。
- 11.28 名誉総裁に三笠宮崇仁親王殿下、名誉顧問に関係各閣僚、日本年委員会委員に関係団体の長をそれぞれお願いすることを決定。
- テーマを“Japan: Then and Now”と変更。
- 事業推進のため、推進委員会の設置を決定(徳間康快委員長、委員9名)。
12. 7 募金開始。主催3団体会員社に募金趣意書を送付。
- 12.13 国内記者発表。日刊紙等23社に対し「日本年」事業計画を発表。
90. 1.18 主催3団体会員社に対して説明会開催。協力を依頼。
2. 9 関西地区会員社に対する説明会開催。
- 2.20 経済団体連合会で、寄付対象事業として「日本年」を認定。各経済団体に募金を開始。
3. 2 ヴァイトハース・フランクフルト・ブックフェア公社事務局長来日。実行委員会と懇談。
- 3.27 書協理事会、「日本年」視察代表団を送ることを決定。日本年シンボルマークを決定。
4. 1 実行委員会の独立事務所を日本出版会館1階に開設。
4. 5 ムスマン・フランクフルト市文化局長来日。
- 5.10 書協通常総会、日本年事業概要と募金状況を報告。協力を依頼。
- 5.14 フランクフルトでの記者発表。服部委員長ほか5名が参加。現地委員会との会合も実施。
- 5.17 推進委員会にワーキング・グループを設置。6名を追加委嘱。
- 5.22 フランクフルト・プレスクラブ一行来日。服部委員長等から日本年概要を説明。
- 8～ 公式ガイドブック(日・英・独)、地図付パンフレット、ポスター等完成、関係方面へ配布開始。
- 9.1-2 鹿児島おはら祭実施、「日本年」事業スタート。
9. 7 坂本龍一コンサート、日本年プレイベントとして実施。以後、「日本年」関連各行事が続々と開始される(7頁の行事一覧表、8頁以降の各行事報告を参照)。
- 9.26 指定寄付期間の12月20日までの延長および募金額限度の14億円への拡大が認可される(大蔵省告示第155号)。
- 9.27 現地マリOTTホテルおよび見本市会場内コングレスホールに事務所を開設。
10. 2 第42回フランクフルト・ブックフェア開会式。石井一二外務政務次官が日本代表として挨拶。
- 18時から「日本館」記者内覧。19時30分から、アルテ・オペラにて日本年前夜祭としての「ミュージックシーンズ」公演が行われる。
10. 3 “日本館”オープニング。9時15分から開場式を実施。以降11月25日まで、各種行事が開催される(行事一覧表および行事報告を参照)。
10. 8 ブックフェア閉幕。“日本館”は約8万1千人の入場者を記録。
- 12.18 実行委員会で、各行事の実施報告、収支概要等を報告。





行事一覧表

事業名	期日(1990年)	会場
①シンポジウム 「世界の転換期と文学表現—ドイツと日本」	9月30日(日)	フランクフルト市 旧市庁舎(Römer)ホール
②シンポジウム 「日本文学はヨーロッパにとって何を意味するか」	10月3日(水)	見本市会場「日本館」 メロディホール
③シンポジウム 「新しい世界秩序を求めて」	10月6日(土)	フランクフルト市 旧市庁舎(Römer)ホール
④連詩の会	10月3日(水)～6日(土) 10月7日(日)	J・W・ゲーテ大学迎賓館 「日本館」メロディホール
⑤文学対談	10月4日(木)	「日本館」メロディホール
⑥俳句の会	10月5日～6日(土) 10月7日(日)	バート・ホンブルク城 「日本館」メロディホール
⑦「日本館」における展示・催事 ・JAPAN : A History in Books ・Japanese Books Today 1990 ・Japanese Publishing & High Technology ・シアター日本の美「四季・色・かたち」 ・日本の芸「木版刷」 ・日本図書の海外翻訳出版目録 ・世界の日本関係図書展 ・日本語教室 ・識字教材と児童書展	10月3日(水)～8日(月)	見本市会場「日本館」
⑧ミュージックシーンズ—伝統と新風	10月2日(火)	アルテ・オパー
⑨歌舞伎公演	10月17日(水)～19日(金)	シャウシュピール劇場
⑩坂本龍一コンサート	9月7日(金)	バルメンガルテン
⑪現代演劇 奴婢訓	10月6日(土)～10日(水)	プロット・ファブリーク
⑫日本音楽の日	10月9日(火)～10日(水)	コメルツバンク
⑬日本のブックデザイン展	9月7日(金)～10月31日(水)	クリングスポール美術館
⑭日本の現代書道展	9月15日(土)～10月5日(金)	聖パウロ教会
⑮パークコレクション名品展	9月16日(日)～11月18日(日)	シルンクンストハレ
⑯ジャパニーズ・アート・シーン 1990	9月21日(金)～10月14日(日)	フランクフルト 空港ギャラリー
⑰現代日本のポスター展	9月21日(金)～10月14日(日)	フランクフルト 空港ギャラリー
⑱ポーランド・クラコフ国立美術館所蔵 浮世絵展	9月21日(金)～11月25日(日)	シルンクンストハレ
⑲土門拳写真展	9月28日(金)～11月4日(日)	フォトグラフィフォーラム
⑳80年代日本現代美術展	9月29日(土)～11月18日(日)	フランクフルト・クンストフェライン
㉑染め花展	9月24日(月)～10月8日(月)	バート・ホンブルク城
㉒生け花展	10月4日(木)～8日(月)	バルメンガルテン
㉓鹿児島おはら祭り	9月1日(土)～2日(日)	ミュージアムウーファー・フェスト会場
㉔第15期囲碁名人戦第一局	10月12日(水)～13日(木)	インターコンチネンタルホテル
㉕第3期竜王戦七番勝負第一局	10月19日(金)～20日(土)	インターコンチネンタルホテル
㉖第3回ドイツ語圏日本語スピーチコンテスト	11月11日(日)	J・W・ゲーテ大学
㉗日本映画祭	9月～10月	ドイツ映画博物館



鹿児島おはら祭り

Kagoshima- "Ohara Fest"

9月1日(土) 19:00 - 21:00

9月2日(日) 16:00 - 18:00

フランクフルト市ミュージアムウーファー・フェスト
Museumsufer Fest

レセプション・歓迎会

9月2日(日) 19:00-

旧市庁舎(Römer) 皇帝の間および地下食堂



おはら祭り総踊り

- 主 催** 鹿児島市おはら祭ヨーロッパ交流実行委員会
(会長=西小野昭雄・おはら祭振興会常任理事)
- 後 援** 鹿児島県 鹿児島市 南日本放送 南日本新聞
フランクフルト「日本年」実行委員会
- 協 力** 日本航空株式会社

- 参加者** 鹿児島市おはら祭ヨーロッパ交流団 総勢 145名
(団長=下竹原弘志・鹿児島商工会議所観光部会長)
- 在フランクフルト日本人と家族 約50名
- フランクフルトおよび周辺市民 多 数

フランクフルト・ミュージアムウーファー・フェストは、フランクフルトの初秋を彩る恒例の祭り。会場となるのは、メイン河畔の美術館の建ち並ぶ美しい通り。通常は、静かなこの“美術館通り”が、祭りの日だけは30万人の人出で埋まった。

ここで、鹿児島からのおはら祭り連が「日本年」の最初の行事として、日本情緒を盛り上げた。リング・ライシュ・フランクフルト市文化担当参事会員、フランク・ムスマン同市文化局長のあいさつのあと、下竹原団長の総踊り開始宣言とともに、踊りは開始された。道の両側に溢れた観客の間を縫って八つの連が踊り、次第にドイツの市民も踊りの列の中に参加していき、最後は熱狂的な盛り上がりとなった。

終了後のレセプションは、旧市庁舎の皇帝の間で行われ、ライシュ女史、坂本登三雄フランクフルト総領事館副領事があいさつし、鹿児島・フランクフルト両市の友好を祝した。

翌日のフランクフルト・アルゲマイネ紙ライン＝メイン版では、第一面に大きなカラー写真入りで「まさにミュージアムウーファー・フェストは踊っていた」と報道された。





日本のブックデザイン展

Ausstellung japanisches Buchdesign

9月7日(金) ~ 10月31日(水)

オフエンバッハ市クリングスボール美術館
Klingspor-Museum (Offenbach)

レセプション

9月6日(木) 20:00-

クリングスボール美術館

講演会

10月1日(月) 19:00 - 20:30

クンストホッホシューレ (美術学校) 講堂

レセプション

10月1日(月) 21:00-

クリングスボール美術館



レセプションで挨拶する清水広報副委員長

主 催 フランクフルト「日本年」実行委員会
クリングスボール美術館

助 成 国際交流基金

協 賛 凸版印刷株式会社

展示内容 現代のブックデザイン

50名の現代日本を代表するブックデザイナー(※)の自選した作品計284点を展示。

近代日本のブックデザインの変遷

明治後期、大正、昭和初期の名作58点により、日本のブックデザインと、造本装幀技術の変遷を紹介した。

武井武雄の世界

童画家として著名な同氏の装幀した刊本作品から傑作 100点を選び、展示した。
伝統的な造本技術から、最新鋭のレーザーを使用したものまであらゆる素材と技法を用いたものである。

※出展作家(五十音順)

安野光雅	栗津 潔	石岡瑛子	上田晃郷	宇野泰行	太田徹也
奥村毅正	片倉茂夫	勝井三雄	加藤光太郎	蟹江征治	亀海昌次
亀倉雄策	川畑博昭	菊池信義	北澤敏彦	木村 勝	清原悦志
工藤強勝	国東照幸	高麗隆彦	坂田政則	志賀紀子	代田 燐



杉浦康平	鈴木 堯	鈴木一誌	鈴木成一	多田 進	田中一光
田村義也	司 修	辻 修平	辻村益朗	戸田ツトム	戸田ヒロコ
中垣信夫	中島かほる	成瀬始子	長谷川郁夫	原 弘	羽良多平吉
平野甲賀	廣瀬 郁	道吉 剛	森下年昭	矢萩喜従朗	山崎 登
山藤章二	横尾忠則				

「日本のブックデザイン展」は、フランクフルト市の東隣の町であるオッフエンバッハ市のクリングスボール美術館で開催された。同美術館は、活字デザイナーで印刷業者であったクリングスボール氏の遺志で設立されたもので、知日家のクリスチャン・シェフラー館長は、今回の企画にも多大な貢献をされた。

9月6日のオープニングには、出版、大学、日独協会関係者、デザイナー等約60名が参加し、清水靖一・広報渉外委員会副委員長、松本和朗フランクフルト総領事、シェフラー館長、オッフエンバッハ市文化担当官があいさつした。

地味な企画であったものの、西欧のものと較べて、より自由で斬新な日本のブックデザインや、日本の文字のデザインに注目が寄せられ、多くの入場者を集め感動を与えた。

講演会 「日本のブックデザイン」 廣瀬 郁（ブックデザイナー）

日本におけるブックデザインに対する捉え方、日本独自の文字とデザインとの関係、書籍販売上の制度からのデザインへの要請等を論じ、さらに、西欧の印刷技術・造本技術の影響のもとで、日本の装幀デザインがどのように変遷してきたかにも触れた。

会場には、日本の装幀作家も10名ほど姿をみせ、講演会後に行われたレセプションとも合わせ、現地のデザイナー、美術学校関係者とも熱心な懇談が行われた。



クリングスボール美術館





坂本龍一コンサート

Ryuichi Sakamoto Konzert

9月7日(金) 20:30 - 21:30

パルメンガルテン植物園内レストラン ヴィラ・レオナルディ
Villa Leonhardi (Palmengarten)

主催 フジテレビジョン

後援 フランクフルト「日本年」実行委員会

協力 パルメンガルテン、レストラン ヴィラ・レオナルディ

出演 坂本龍一 (vocal, piano)

オキナワ・ガールズ (chorus, 三線)



坂本龍一氏

坂本龍一 かつてYMO（イエロー・マジック・オーケストラ）のメンバーとして世界的に活躍し、1989年には映画「ラスト・エンペラー」の音楽で米アカデミー賞に輝いた。その後も、「シェルタリング・スカイ」「侍女の物語」等の映画音楽等で活躍している。

演奏曲 Merry Christmas Mr. Lawrence (戦場のメリークリスマス)

Amore

Before Long

The Handmaid's Tale

Asadoya Yunta (安里屋ユンタ)

Chinsagu No Hana (てんさぐの花)

The Last Emperor

(encore) The Sheltering Sky



熱気あふれる会場

フジテレビジョンの絶大な協力を得て、坂本龍一&オキナワ・ガールズのコンサートが「日本年」プレイベントとして開催された。

この日の会場には、ハンス・ユルゲン・モーク・フランクフルト市第2市長、荒木忠男ケルン日本文化会館館長、松本和朗フランクフルト総領事夫妻をはじめ、市当局要人、総領事館関係者、マスコミ関係者、日本企業駐在員、一般市民など約500人が出席した。

モーク第2市長から、「日本年」事業に対する強い期待が表明され、続いて清水靖一・広報渉外副委員長および松本総領事から、同事業に取り組む日本側の熱意が紹介され、多くのドイツ国民が日本の文化と接し相互理解を深めてもらいたいとのあいさつがなされた。

断続的に激しく降る雨によって、当初予定していたレストラン前庭でのコンサートがテラス内に急速変更されるというハプニングはあったが、かえって間近に演奏を聴くこととなり、熱気溢れるコンサートとなった。

この模様は、日本時間9月7日深夜のフジテレビ系列「ヒットスタジオR&L」および「ヒットスタジオ インターナショナル」で衛星放送されたほか、ヨーロッパ22カ国でも放映された。



第15期囲碁名人戦第一局

15. "Go-Meijin-Sen" Erster Titelkampf

9月12日(水)・13日(木) 9:00 - 18:00

ホテル フランクフルト・インターコンチネンタル
Hotel Frankfurt Intercontinental

レセプション

9月11日(火) 18:30-

ホテル フランクフルト・インターコンチネンタル



小林名人(右)と大竹九段

主催 朝日新聞社
財団法人 日本棋院
協力 フランクフルト「日本年」実行委員会
日本航空株式会社

対局者 小林光一名人
大竹英雄九段(挑戦者)

第15期囲碁名人戦第一局が、フランクフルトで開催された。名人戦の海外での開催は、1987年のニューヨーク、1989年のロンドンに次いで3度目となる。

今期の名人位は、小林光一名人と挑戦者大竹英雄九段の間で争われた。

対局前夜のレセプションでは、ドイツ囲碁連盟の関係者や地元在住の日本人など、日独の囲碁ファン約200名が出席し両棋士を激励し、主催者を代表し、松下宗之朝日新聞東京本社編集局長があいさつを行った。

対局は、9月12日午前9時、挑戦者大竹九段の先番で始まり予想通りの熱戦が展開され、翌13日170手にて小林名人が中押し勝ちとなった(立会人・石田芳夫九段)。両日、大盤解説会場では、日本のプロ棋士の解説と指導碁が行われ、熱心な囲碁ファンではほぼ満席の盛況ぶりであった。なお、この模様は、両日にわたりNHK衛星第2放送において中継放送された。

一方、名人戦対局開始と同時に、ドイツ囲碁連盟主催のアマチュアトーナメント大会が二十代から三十代のドイツ人を中心に約100名を集めて同ホテルの会場で開催され、対局は深夜まで及んだ。



アマチュアトーナメント大会





日本の現代書道展

Japanische Moderne Sho

9月15日(土) ~ 10月5日(金)

聖パウロ教会

Paulskirche

レセプション

9月14日(金) 18:00 - 20:00

聖パウロ教会

主催 財団法人 毎日書道会

毎日新聞社

協賛 フランクフルト「日本年」実行委員会

展示作品 毎日書道会役員85氏による85点

漢字、かな、近代詩文書、一字書、篆刻、刻字、前衛書の7部門にわたって展示

レセプションにおける揮毫

金子聰松、青柳志郎、足立翠泉、石飛博光、佐久間玉溪、長野文子、森本龍石の

7氏による漢字、近代詩文書、一字書



聖パウロ教会地下展示場



毎日書道会の書家による揮毫

1948年以来、42回を数える毎日書道展の毎日書道会が主催する現代日本書道展が、フランクフルト旧市街の中心部に立つ聖パウロ教会で開催された。同教会は、1848年の三月革命の後、初のドイツ国民会議の舞台となった由緒ある建物であり、今回のドイツ統一に際しても、記念式典のひとつがここで開催された。書道展はこの教会の地下にある展示場で行われた。

14日午後6時から開催されたレセプションでは、来賓として松本和朗フランクフルト総領事、イルゼ・ファウベル・フランクフルト市議が出席、主催者側として、馬弓良彦毎日新聞社取締役、金子聰松毎日書道会監事があいさつされた。

その後に行われた書家7氏による揮毫は、人垣ができるほどの人気で、書道に対する関心の高さがうかがえた。会期中は予想以上の来場者でにぎわいをみせた。なお、揮毫実演は、10月3日午後「日本館」の会場でも実施され、人気を集めた。



ポーランド・クラコフ国立美術館所蔵・浮世絵展

Japanische Holzschnitte aus dem Nationalmuseum in Krakau/Polen

9月21日(金)～11月25日(日)

フランクフルト シルンクンストハレ

Schirn Kunsthalle Frankfurt

レセプション

9月20日(木) 18:00-

シルンクンストハレ

講演会

10月4日(木) 16:00-

レストラン・キッコーマン



シルンクンストハレ

主催 シルンクンストハレ

国際交流基金

協力 フランクフルト「日本年」実行委員会

クラコフ国立美術館

講談社

展示品 クラコフ国立美術館所蔵のヤシンスキー・コレクションから浮世絵の名品を126点展示。同コレクションは、ポーランドの富豪フェリクス・ヤシンスキー卿が、19世紀末に収集した約4,600点にのぼる浮世絵のコレクションである。今回展示されたのは、鈴木春信、勝川春章、喜多川歌麿、葛飾北斎、歌川豊国、歌川国貞、歌川広重などの作品である。

講演会 「浮世絵風景画の巨匠二人——北斎と広重の富士山図の相違について」

講師 小林 忠(学習院大学教授・日本美術史)

長い間、展示される機会もほとんどなく埋もれていた同コレクションの大規模な展示が今回実現した。8月から、同コレクションから全く異なる作品による巡回展が日本でも行われており、その質・量ともに豊富なことが改めて注目された。

オープニングのレセプションでは、同展の開催に努力したシルンクンストハレのクリストフ・ヴィタリ館長、荒木忠男ケルン日本文化会館館長、ポーランド・クラコフ国立美術館のゾフィア・アルベロワ氏があいさつを行った。

会期中は、同時開催のバークコレクション展とともに、多くのドイツ人をはじめとする観客を集め、浮世絵美術に対する認識を大いに高めた。

また、10月4日には、江戸美術に特に造詣の深い小林忠教授による講演会が開催された。専門的で高度な内容にもかかわらず、美学生をはじめ、約40人のドイツ人聴衆が参加し熱心に聴講した。





バークコレクション名品展

Die Kunst des Alten Japan

— Meisterwerke aus der Mary und Jackson Burke Sammlung

9月16日(日)～11月18日(日)

フランクフルト シルンクンストハレ

Schirn Kunsthalle Frankfurt

レセプション

9月15日(土) 18:00-



主催 シルンクンストハレ

協力 フランクフルト「日本年」実行委員会

展示品 145点

仏像・仏具、絵画（仏画、絵巻、土佐絵、水墨画、障屏画）、書蹟、漆器、蒔絵、陶器等の分野にわたり、主として鎌倉期から江戸期における日本美術を概括的に紹介するという構成をとる。特に絵画は、約75点と展示品全体の約半数を占めており、明兆、雪村等の水墨画をはじめ、土佐光起、狩野探幽、酒井抱一、尾形光琳、英一蝶、長沢蘆雪、曾我蕭白、伊藤若冲等の優品が紹介された。

同展は、アメリカ・ニューヨークにおける日本古美術コレクションとして名高い、バークコレクションから、名品をよりすぐって展示したものである。同コレクションの大規模な展示は、過去1975年にニューヨーク・メトロポリタン美術館、1985年に東京国立博物館で開催されている。

開会レセプションには、シルンクンストハレのクリストフ・ヴィタリ館長、コレクション・オーナーのメアリー・バーク女史、松本和朗フランクフルト総領事、今回の展覧会実現に努力したグンヒルト・アヴィタビレ女史（現ニューヨーク・ジャパン・ソサエティ・ギャラリー、ディレクター）があいさつを行った。

会期中は、同じ会場で開催された浮世絵展と合わせて、「日本年」関係の展覧会の中でも、入場者の多いもののひとつとなり、日本美術の紹介に大きな成果をあげた。





ジャパニーズ・アート・シーン 1990

Japanische Kunstszene 1990

9月21日(金)～10月14日(日)
フランクフルトエアポートギャラリー
Flughafen Frankfurt-Airport Gallery

レセプション
9月21日(金) 11:00 - 13:00
エアポートギャラリー内



タナカノリユキ氏作品

主催 フランクフルト「日本年」実行委員会
フランクフルトエアポートギャラリー
助成 国際交流基金
協賛 三洋証券株式会社

出展作家 タナカノリユキ 菱沼良樹 日比野克彦
監修 中村信夫(美術評論家)

世界的視野での「現代の日本」の姿を表すひとつの象徴として、ヨーロッパをはじめ海外進出する日本の企業のロゴマークをモチーフに取り上げ、日本と世界の関係性を見つめていくことをコンセプトとする展示会。ヨーロッパの玄関といえるフランクフルト国際空港において展開することで、ここを行き交う人々を触発し、より広い世界に発信することを意図した。

出展されたのは、日本の現代美術界で既成のジャンルにとらわれず、ユニークな活動を続けている若手芸術家3氏の作品である。

9月21日に「現代日本のポスター展」と合わせて行われた開会レセプションには、雨天にもかかわらず、多くの招待客が集まった。

あいさつを行ったのは、同ギャラリー責任者のヴァイター・ロイス氏、松本和朗フランクフルト総領事、監修者の中村信夫氏、出展作家から日比野克彦、タナカノリユキの両氏、およびポスター展監修の鈴木八朗氏であった。



菱沼良樹氏作品



(左より) タナカ、中村、日比野の各氏



日比野克彦氏作品





現代日本のポスター展

Moderne japanische Poster Ausstellung

9月21日(金)～10月14日(日)

フランクフルトエアポートギャラリー

Flughafen Frankfurt-Airport Gallery

レセプション

ジャパニーズ・アート・シーンと合わせて開催
された

主催 フランクフルト「日本年」実行委員会

フランクフルトエアポートギャラリー

協賛 大日本印刷株式会社

出展作家 浅葉克己 井上嗣也 奥村靱正 亀倉雄策 サイトウマコト
佐藤晃一 鈴木八朗 田中一光 戸田正寿 永井一正
福田繁雄 松永 真



ポスター展会場入口

1989年にベルギーで開催された「ユーロパリア'89・ジャパン」でも大好評を博した展覧会。日本を代表する、巨匠から若手まで12名のグラフィックデザイナーの作品を高水準を誇る日本の印刷技術によって再現したポスター約120点を展示した。



欧州の空の玄関、フランクフルト空港





染め花展

“Wiederbelebung der Rokoko Epoche” Seidenblumen-Ausstellung und Kurs

9月24日(月)～10月7日(日)

バート・ホンブルク城

Schloß Bad Homburg

講習会

9月25日(火)～27日(木)

毎日午前、午後の各1回 計6回

主催 在フランクフルト日本国総領事館

ヘッセン州古城庭園管理局

協力 フランクフルト「日本年」実行委員会

染め花制作 安田早葉子(安田早葉子染め花学院主宰)



国際的に活躍する染め花工芸の第一人者、安田早葉子氏の個展が、由緒あるロココ様式の古城、バート・ホンブルク城で行われた。歴史を感じさせる荘重な古城の部屋が、豪華な絹の染め花約1万本を使った約50点の作品によって彩られた。同城は、17世紀の砦跡に建造され、プロイセン国王ウィルヘルムⅠ世(後の初代ドイツ帝国皇帝)の夏の館として用いられたものである。

また、9月25日から27日にかけて、午前と午後の2回、計6回にわたり、一般入場者を対象に染め花制作の講習会を開催し、好評を博した。



バート・ホンブルク城



土門拳写真展

Fotoausstellung "Ken Domon"

9月28日(金) ~ 11月4日(日)

フォトグラフィフォーラム・フランクフルト

Fotografie Forum Frankfurt

レセプション

9月28日(金) 19:00-

フォトグラフィフォーラム

主催 フランクフルト「日本年」実行委員会
フォトグラフィフォーラム

特別協力 財団法人 土門拳記念館

助成 国際交流基金

協賛 株式会社 ニコン

出展作品	古寺巡礼	72点	
	文楽	21点	
	日本の風景	16点	
	ヒロシマ	31点	計 140点

企画・監修 三木 淳 渡辺好章 岸 哲男 大下 敦



開会レセプション

日本を代表する写真家、土門拳の作品を通じて、日本の心・姿、そして日本人の自然観を表現しようとした写真展。「古寺巡礼」は、日本人の美意識の原形を遠く古代から中世に求め、大和・京都をはじめ、九州の石仏や東北・中尊寺までをめぐった作品。「ヒロシマ」は被爆者の生活を克明に追い、ともに傑作の世評高いものである。

今回の写真展は、長く病床にあった土門氏が会期直前の9月15日に逝去し、図らずも同氏の遺作展となった。また、今回は同氏の海外での初の個展でもあった。

開会レセプションには、写真関係者をはじめ多方面から参加を得た。開会あいさつには、実行委員会からは住威久雄・広報渉外委員会および推進委員会委員、監修者を代表して渡辺好章氏、協賛をいただいた株式会社ニコンから小野茂夫専務取締役が立たれた。

現地新聞でも、土門作品を多面的に捉えた同展の批評が取り上げられるなど、好評を博した。